百々裏話（15）

おもて　あきら

大原御幸

能楽堂で、舞台に目をそそがず、専ら謡本と首つ引きの人々を、首本党などと悪口するようであるが、この曲などは、極端に動きの少ない能であり、謡本を手にして、音曲能として鑑賞するのに適わしい曲のようである。旧稿に書いたことのむし返しではあるが、大原御幸は、江戸初期に〝うたい〟のための曲として伝えられていたらしい。徳川家康の家臣で、慶長元和の頃に観世左近大夫幕閑（黒雪）に謡を習った、豊島作右衛門所持の謡本には、大原御幸に次のような奥書がある。

右黒雪に能々相伝。……此謡、座敷謡につくりたる故、大事なる由、左近申され候。法皇、シテ、ツレ、ワキ、供、地まで揃候はねば成らず候。然間、左近大夫はれなる座敷にて一度も謡候はぬよし申され候。

ここで座敷謡と言っているのは、能謡に対する語で、今日の素謡のことである。素謡は室町末期頃からさかんになって、観世黒雪の時代には、素謡にふさわしい曲と、ふさわしくない、曲との選択に留意されていたらしく豊島本によると、大原御幸・砧・蟬丸などが適わしい曲、紅葉狩・西行桜・石橋・小督などが適わしくない曲とされている。

先の奥書は、素謡が当時すでに一人一役で謡われていたことや、貴人が能役者の素謡を鑑賞することが珍しくなかったことを示す資料としても注目されるが、大原御幸を座敷謡のために（素謡用として）作った曲であると伝えていることが、最も興味深い。大原御幸の作者は不明であるが（世阿弥作という説もある）、金春禅竹の著書にその曲名が見えているから、かなり古い曲である。従って、長い間には誤まった伝承が生まれることも想像できるので、豊島本の奥書をそのまま鵜呑みには出来ないのであるが、世阿弥の頃に既に初瀬六代のような長大な謡い物が作られているのであるから、大原御幸を謡い物として作るということも考えられないことではない。室町時代に大原御幸を演じた記録が一つも残っていないこと（能楽源流考、演能曲目調査資料による）も、そのことと関係があるのかも知れない。しかし、他にはこのようなことを伝えた資料が見当らないし、一応能としての体裁も整っている曲であるから、大原御幸を素謡用の曲ときめてしまうのは、どうも無理なようである。ただそれが観世大夫の言であるだけに、慶長元和の頃に、この曲が能としてはほとんど演じられず、専ら謡のための曲として伝えられていたことは、先ず確実であろう。

大原御幸の古写本はあまり残されていない





ようで、天理図書館所蔵の室町末期筆写の本や、川瀬一馬博士が謡曲名作集の中巻に紹介されている三浦本、下懸りの車屋本（野上本、毛利本）などが古いものであろう。また大原御幸の謡本として特筆すべきは、光悦謡本の中の特殊本である。光悦本には幾つかの種数があるが、道常、厚葉斐紙の料紙の一枚一枚に雲母模様のある本が第一種、雲母模様は表紙だけであるが料紙に五色の色紙をまぜ用いてあるものが第二種とされており、この両種が装幀の美麗なことで著名なのである。ところが鴻山文庫にある大原御幸は、五色の色紙の一枚一枚に雲母模様があり、第一種と第二種の意匠を兼ねたすばらしい美本である。是と同種の本は従来知られておらず、まさに天下の孤本を称すべき稀覯本であろう。私が光悦謡本に関心をもつようになつたのも、この本を一見して以来のことなので、特にこのことを書いておきたい。なお同書の本文は、第二種本と同版であり、第二種を刊行する際に特製された本らしい。

車僧

数ある謡曲の現行曲の中で、候の一つも無いのが身延、一つしか無いのが車僧ということになつている。車僧の唯一の候は、ワキの着ゼリフの中の「四方の景色を眺めうずるにて候」であるが、天理図書館所蔵の室町末期写本にはこの着ゼリフが無い。すれば車僧も身延と並んで候の無い曲ということになる。もつとも謡本の着ゼリフの有無は、実際の演能に於ける着ゼリフの有無と一致しないことが多いから、昔は候が無かつたとも言えないようである。天理本は、天文十二年三月十一日に観世次郎大夫（信光）の本を写した本からの転写本で、管見では唯一の観世流古写本である。最後が「合掌してこそ失せにけれ、合掌してぞ失せにける」と返して謡うようになつているなど、小異は有るが、現在の詞章との間に大きな違いは見当らない。下懸りの古写本では、鴻山文庫蔵の金春大夫照（禅鳳の子）本が最古のものであろう。

車僧のアイは愉快な間狂言である。このアイは、古来、前段の禅問答の内容をわかり易く説明することに、各流とも苦心したらしいが、江戸中期以後はむしろワキをくすぐるあたりのおかしみを強調することに、苦心が転じたらしい。酒一升を賭けて、笑つたらワキがおごり、笑わなかつたら狂言がおごる約束で舞台へ上つたが、秘術を尽くしての努力も空しくワキが笑わないので、狂言が最後に、「一升取られたかな」と失望の嘆声を発したところ、ワキは思わずニヤリと笑つてしまつたという逸話が能楽盛衰記に見えるが、今でも楽屋でこれに類したことがやりとりされるらしい。野村万蔵氏の「狂言の道」によると間の終り近くのノツて謡うところは、昔は囃子が入つたもので、近時囃子方の一方的な考えにより省かれてしまつた由である。ちよつと残念なことである。

（33・4・28）

